

民族舞踊の教材活用の可能性を探る 3 一家庭分野での和服着装と盆踊りのプログラム

弓削田 綾乃 (和洋女子大学)
長島 未玖 (和洋女子大学大学院)
柴田 優子 (和洋女子大学)

1. 研究の背景と目的

本研究は、民族舞踊のアプローチの一つとして、中学校の家庭分野に着目した実践研究の第3弾である。これまで、まず家庭分野の指導要領および教科書を検討し、衣文化の単元での親和性を見出した(第73回大会)。次に、中学校での浴衣着装の授業時に、「活動実験」として盆踊りを試行した(第74回大会)。その結果、浴衣着装と盆踊りの組み合わせによって、和服の理解だけでなく、身体文化への気づきや共に踊る楽しさ等が得られていたことがわかった。

これらを踏まえて本発表では、家庭分野での着装体験に盆踊りを組み込んだ、汎用性のあるプログラムを提示することを目的とする。このプログラムには、教材として映像コンテンツを使用するため、教材作成から取り組んだ。

2. 研究の方法

中学校家庭科目の衣文化の単元で使用するための、盆踊りを素材とした教材コンテンツを作成する。そして、それを活用した授業を試行し、体験後に生徒から集めたアンケート結果を検討する。授業実践の概要は、次の通りである。

時期：2023年9月、対象：千葉県内の公立中学校、科目：家庭、時間：1時間40分(2時限分)、場所：武道場、ねらい：浴衣を着装した活動を行い、文化的視点も含めた洋服との違いや着崩れの理由と直し方を理解する、手順：①事前アンケート②浴衣の構成を学ぶ③浴衣を着る④盆踊りを踊る⑤浴衣をたたむ⑥事後アンケート

②～⑤の教材コンテンツの作成および授業での指導は、教員免許取得又は見込みのW女子大学生・大学院生・助手らが中心に行った。また、アンケートの回答はタブレットで行い、クラウド上で集計した。

3. 結果および考察

3-1. 盆踊りの教材とプログラムの構築

着装の単元での盆踊りの時間は15分程度とした。曲目は、次の理由で「炭坑節」とした。

・ 動作について：5パターンに分けられ、それぞれ日常動作の言葉で説明できる(「掘る」「かつぐ」「押す」など)。前後の移動のステップと、上肢の多方向への動きの組み合わせによ

り、「動きにくさ」「動きやすさ」への気づきや着崩れを意識しやすいと考えた。

・ 曲目について：盆踊りの定番曲とされる。背景の説明や音源の入手等が比較的易しい。

踊り方の指導は、現場の教員が担うことを想定し、動画コンテンツを作成した。作成の主な留意点は、動作パターンごとの教授、動作のポイントとして静止画を活用、端的なキャプション、一人での踊りから集団の踊りへの展開、和装で動くポイントの提示等である。

展開は、指導者が盆踊りおよび炭坑節の背景を紹介⇒指導者がコンテンツを示し、生徒は視聴しながらその場で踊る⇒全員で輪になって踊る、という流れを設定した。

以上のように、15分程度で最終的に全員での輪踊りを目指すプログラムとした。なお、本プログラムを参考にして、地域に伝わる伝承舞踊を題材にしたり、領域横断型の取り組みにつなげたりすることも可能と考えている。

3-2. アンケート結果の検討

「盆踊りを踊った感想」としては、「浴衣にあった動き」約56%、「普段とは違う身体の使い方」約41%、「リズムにのる」約32%、「他の人と一体感を感じる」約23%で、総じて盆踊りの体験が肯定的にとらえられていた。また、曲目に関しては、「振り付けがやさしい」が約48%だった一方で、「難しい」が約27%だった。今回の教材が比較的踊りやすい曲目であったと考えられる。時間的制約や皆が楽しめること等を考慮すれば、複雑な動きを伴う踊りは適していないと考えられた。

「盆踊りの体験で、日本独特の動き方を感じられたか」という質問には、ほぼ全員に気づきがあったことが判明した。「動かしにくい身体の部分」としては、足が約72%、腕が約30%、腰が約28%となり、「なし」と答えた人が17%いた。さらに「着崩れ」に関しては、着崩れを最も感じたのが「えり元(えり・えもん)」(約69%)で、最も感じなかったのが「すそ」(約65%)という結果だった。動かしにくいと感じる部位は「足」であるため、慎重に裾さばきをしながら踊ったのではないかと推察された。

自由記述では、「着方と盆踊りの振り付けの意味を知ることができた」「盆踊りを踊って、日本の文化の特徴がよくわかった」「これからも日本の文化をもっと知って関わっていきたい」「クラスの一体感があって楽しかった」などがあった。「衣」のみにとどまらない、より広範な文化理解へとつながる可能性があることが示唆された。指導法としては、盆踊りの教材コンテンツを活用したことによって、短時間で踊れるようになり、学びを深められたと考えられる。